

国 語

第1問 次の各問いに答えよ。

問1 次の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

- (1) 兄は太宰治にシンスイしている。 1
- (2) 大臣をヒメンする権限をもつ。 2
- (3) 個性的なデザインのクツを履く。 3
- (4) 祖父の家をヒンパンに訪ねる。 4
- (5) ショウソウ感にかられる。 5
- (6) 試合で優勝した妹をホめる。 6
- (7) 相手国とのセツショウを重ねる。 7
- (8) 大学では英文学をセンコウする。 8
- (9) 彼はチャレンジ精神がオウセイだ。 9
- (10) 外国との条約をヒジュンする。 10

問2 次の傍線部の漢字の読みをひらがなで記せ。

- (1) 誤った考えが世間に流布する。 11
- (2) 特定の人に対して便宜を図る。 12
- (3) 悪天候が続く、気力が萎える。 13
- (4) 時間の都合で詳細を割愛する。 14
- (5) 大臣が失言によって更迭される。 15
- (6) 大学の教授に作曲を委嘱する。 16
- (7) 中学時代の恩師が逝去される。 17
- (8) 長期にわたる工事を完遂する。 18
- (9) 金属の表面を磨いて艶を出す。 19
- (10) 真摯な態度で仕事に取り組む。 20

第2問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

- 1 ^{(注)A} SRシステムを使った実験をご紹介します。
- 2 被験者にHMDとヘッドフォンを装着してもらい、「現実シーン」「代替現実シーン」の2種類の体験してもらいます。「現実シーン」とは「この世界」のこと、「代替現実シーン」が「もう一つの世界」のことです。
- 3 現実シーンで表示されるのは、HMD前方正面に装着された、ヘッドマウントカメラから入力された映像です。目の前で起きた現象がリアルタイムでそのままディスプレイに映し込まれます。カメラとディスプレイが自分の目と外界との間に入っていますが、外を直接眺めている普段の状態とほとんど変わりません。また、ディスプレイに表示されている映像は、直前まで見ている部屋の様子となんら変わりありません。そのため、被験者には、自分がいま見ている映像は現実だという強い信念が生まれます。
- 4 代替現実シーンで映しだされるのは、被験者が座るはずの場所で、被験者が実験を行う部屋に来る前に、あらかじめ記録モジュールをつかって撮影し、編集しておいた映像です。事前にパソコンで部屋を360度全方位にわたって撮影しておいた映像データと頭部方向センサーを連動させると、被験者の頭部の動きに合わせて、自由に映像を切り出すことができます。被験者は、頭を右へ向ければ、代替現実シーンの右を、左へ向ければ、代替現実シーンの左を見ることとなります。つまり、過去に記録された映像の中でも、現実と同じように、頭を動かすことで周囲を見回すことができます。
- 5 また、音声入力に用いるマイクroフォンはどちらの場合も被験者のそばの、同じ位置にあります。そのため、被験者はどちらのシーンでも同じ方向から同じ質の音を聞くこととなります。
- 6 こうすると、**I**にも、**II**にも、現実と代替現実で、被験者はほぼ同じ体験をするこゝとが可能になります。二つのシーンのちがいに気づくとすれば、シーンの切り替えの瞬間です。なぜなら、頭部方向センサーには、多少の誤差があるため、映像のつなぎ目で現実シーンと代替現実シーンの間に「^(注)コマ落ち」のような現象が起きやすいからです。
- 7 しかし、ぼくらは被験者が頭の向きを変える瞬間にパッと現実シーンと代替現実シーンを切り替えれば、切り替わったことに気づかないだろうと考えました。なぜなら、もともと頭を動かしている時には映像は大きく動きますし、その最中に映像の切り替えによるコマ落ちのような現象が発生しても気づきにくいからです。
- 8 実際、被験者21人を対象に実験を試みたところ、すべての被験者がこの切り替えに気がつくことができませんでした。
- 9 あらかじめ撮影しておいた実験者が代替現実シーンに登場すると、被験者は、実際にはその実験者が目の前に存在しないにもかかわらず、存在するものと信じて話します。もちろん事

前に会話の中の被験者の反応を細かに予測できるわけではないので、被験者と映像の中の実験者の間では簡単な言葉のやりとりしかできません。Ⅲ 短時間の会話であればちゃんと成立するので、被験者は、本当にそこに人がいるとだまされてしまう。

10 この様子を外から見た人はたいい「クツクツ」と笑います。被験者が誰もいない空間に向かつて話している様子は、被験者本人がまったく平然としているだけに滑稽^アだからです。

11 しかし、実際にS Rシステムを体験すると笑えないかもしれません。ぼくらは種明かしのため、被験者に、次の人の実験の様子を見てもらいました。自分の次の被験者が誰もいない空間へ言葉を発しているのを目の当たりにすると、直前^Bの同じ状態の自分を思い起こすのか、どの被験者も複雑な表情を浮かべるのです。

12 最初におこなった一連の実験では、パノラマビデオカメラで、被験者がS Rシステムを設置した部屋に入ってくるところから撮影して、その映像を代替現実シーンの一部として使いました。

13 実際は代替現実シーンを見ていても、現実を見ていると信じている被験者に「自分が部屋に入ってきたときの様子」を見てもらうと、突然あらわれた目の前の自分にびっくりします。ほとんどの人は、最初、何が起きているのかわかりません。しかし、しばらく考えた後に、突然映像の中に現れた人物が自分であると気がつく瞬間が訪れます。自分自身の分身、ドッペルゲンガーが出現する。このような体験は、ふだんの生活ではありえないので、すべての被験者は、その瞬間に初めて自分が代替現実シーンを見せられていることに気がつきます。HMDの映像が操作されていたことに気がつくのです。

14 通常の手品なら、この瞬間に全てが終わります。いったん被験者がHMDの映像がウソかもしれないと思えば、それ以降の映像を疑ってかかるからです。ところがS Rシステムではそうはいきません。映像が操作されている可能性を知った後でも、以下の手順を踏めば、代替現実シーンを現実だと信じてもらえる状況を作ることができます。

15 ドッペルゲンガーを経験した後、別の代替現実シーンに切り替えます。そして、その映像の中の実験者が、

「びっくりしました？ いまのは、あなたが先程この部屋に入ってきた時に撮影した様子を、S Rシステムで再生した過去の映像なのです」

と伝えます。被験者は、ドッペルゲンガーの登場によって自分が代替現実シーンを見せられていたと気づいた後であるにもかかわらず、代替現実シーンの中の実験者が現実にも目の前にいると考えます。本当はそれすらも代替現実シーンなのですが、実験者の発言や映像そのものに矛盾を感じない限り、現実シーンを見ていると信じてしまうのです。この様子は、客観的に見ていると明らかに矛盾しているのですが、ほとんどの被験者はドッペルゲンガー後に提示される代替現実シーンを見破ることができません。

16 ぼくたちは、明らかにおかしい目の前の状況を疑うことはⅣ 簡単にできます。しかし、

一度疑った後すぐに、おかしなところがほとんどない代替現実シーンを見せられると、それを無条件に信じる傾向があります。

17 さらに、最後に、ちゃんと現実シーンに切り替えた上で、実験者が登場し（本当に被験者の前にあらわれて）、

「——って言っていた、いまのシーンも過去に記録した記録映像でした。いまご覧になっているこれが本当の現実です」

と言います。ぼくたちの実験では、本当に現実に戻ったと思う被験者もいれば、また引き続き代替現実を見せられていると信じたままの被験者もいました。複数の代替現実シーンを連続して見せて、その中で「じつはいまのは現実だった」「というのもウソだった」と何度も現実と代替現実をひっくり返していくと、ほとんどの人は混乱して、自分が現実を体験しているのか代替現実を体験しているのか区別できなくなってしまいます。

18 詐欺師に、「ぼくはウソつきですが、ぼくの話していることは全部ウソです」と言われると、何が本当なのか分からなくなって、混乱しますよね。これを「嘘つきのパラドクス」と言います。SRシステムは、嘘つきのパラドクスの状況を実際に作る事ができるのです。

19 被験者はみな、HMDを外した瞬間にどこかホツとした表情をします。そして、必ずこうたずねます。

「ここは本当に現実ですか？」

それに対してぼくたちは、

「おかえりなさい。ここは現実ですよ」

と答えますが、結構な割合の被験者が、カメラやHMDを外して、自分自身の眼で世界を見ているにもかかわらず、自分が現実に戻ったかどうかよくわからない不思議な気持ちがあると云います。もちろん、時間が経てば消えていくものですが、日常生活で同様の感覚に触れることはほとんどありません。

（藤井直敬『拡張する脳』による。問題作成の都合上、省略した箇所がある。）

（注） SRシステム——記録モジュール、制御モジュール、体験モジュールで構成された代替現実システム。

HMD——頭部に装着する映像表示装置。ヘッドマウントカメラと頭部方向センサーが装着されている。

記録モジュール——記録機能をもつ部品。ここでは、マイククロフォンとパノラマビデオカメラ。

コマ落ち——音声や映像が一瞬途切れること。

問1 二重傍線部ア・イの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから一つずつ選べ。

ア 滑稽

① 納得できない

21

② 怪しい

③ くだらない

④ 浅はかな

⑤ おかしい

イ 結構な

① 申し分のない

22

② かなりの

③ 多少の

④ 申し訳程度の

⑤ いくらかの

問2 空欄Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに入る語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。Ⅰ 23 Ⅱ 24 Ⅲ 25 Ⅳ 25

① 総合的

② 視覚的

③ 現実的

④ 聴覚的

⑤ 瞬間的

⑥ 比較的

問3 空欄Ⅲに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 26

① あるいは

② なぜなら

③ 逆に

④ その上

⑤ ところで

問4 傍線部A「SRシステムを使った実験」とあるが、この実験ではどのようなことが起きるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 27

- ① 代替現実シーンで映しだされるのはあらかじめ編集された映像なので、必ずしも現実シーンで見ていたのと同じ映像とは限らず、被験者は混乱してしまうこと。
- ② 現実シーンでは直前まで見ていた部屋の様子が表示されるので、その中に登場する実験者や自分のドッペルゲンガーが目の前に存在すると信じてしまうこと。
- ③ 実験者によって現実シーンと代替現実シーンが操作されていることに気づかず、被験者は代替現実シーンを現実シーンだと思いこんでしまうこと。
- ④ HMDを装着すると、代替現実シーンでは過去に撮影された映像が表示されるので、被験者の動きに沿って現実シーンの左右を見回すことができること。
- ⑤ 現実シーンと代替現実シーンが切り替わるという感覚は実際の日常生活ではあり得ないため、コマ落ちという現象にも気づかないこと。

問5 傍線部B「同じ状態」とあるが、どのような状態か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 28

- ① 被験者は現実シーンに登場した実験者を実際に存在する実験者と信じているため、代替現実シーンに登場した実験者を本当の実験者であるとは信じられない状態。
- ② 被験者は現実シーンと代替現実シーンを繰り返し見せられているうちに区別がつかなくなり、ついには自分のドッペルゲンガーを見せられて混乱している状態。
- ③ 実験者を事前に撮影しておくため、代替現実シーンでの被験者との会話は短時間しかできないが、被験者の反応を予測できるため会話がスムーズに進んでいる状態。
- ④ 現実シーンと代替現実シーンの切り替えの工夫により被験者はシーンの切り替えの瞬間に気づかなかつたが、ようやくだまされていたことに気づいた状態。
- ⑤ 被験者は前もって撮影された実験者と代替現実シーンで話しているが、本人は実際に目の前に存在する実験者と現実シーンで話していると信じている状態。

問6 傍線部C「嘘つきのパラドクスの状況」とあるが、この場合どのような状況のことか。そ

の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

29

① 詐欺師の「ぼくはウソつきですが」という発言が真であってもウソであっても「ぼくは正直者」なのか「ぼくはウソつき」なのかという事実は一つであるという論法と同じく、現実の映像を使っているという点では代替現実シーンの映像も現実といえるという状況。

② 詐欺師の「ぼくはウソつきですが」という発言が真であってもウソであっても「ぼくは正直者」なのか「ぼくはウソつき」なのか判断することができないという論法と同じく、被験者が現実シーンと代替現実シーンのどちらにも信じられなくなるという状況。

③ 詐欺師の「ぼくはウソつきですが」という発言を真とするかウソとするかによって「ぼくは正直者」であるという結論を「ぼくはウソつき」という結論にすり替える論法と同じく、実験者が代替現実シーンを現実シーンに見せかけているという状況。

④ 詐欺師の「ぼくはウソつきですが」という発言を真としてもウソとしても「ぼくは正直者」であるのか「ぼくはウソつき」であるのかが断定できないという論法と同じく、被験者が現実シーンなのか代替現実シーンなのかを区別できなくなるという状況。

⑤ 詐欺師の「ぼくはウソつきですが」という発言を真とするかウソとするかで「ぼくは正直者」という結論と「ぼくはウソつき」であるという結論の矛盾を生じさせる論法と同じく、現実シーンと代替現実シーンには被験者が気づかないような矛盾があるという状況。

問7 本文の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

30

- ① ③～⑤段落では、SRシステムでは現実と代替現実シーンでほぼ同じ体験ができる理由を述べ、⑦段落では、それに対する筆者独自の疑問点を述べている。
- ② 筆者は、⑧段落以降の実験の事例を通して、被験者を意図的にだますことができるSRシステムの映像操作を説明し、⑩段落で悪用される可能性について示唆している。
- ③ ⑭段落では、通常の手品と比較してSRシステムの優位性を述べ、⑮段落以降でその根拠となる実験を紹介して人間の陥りやすい傾向の指摘へとつなげている。
- ④ ⑯段落では、⑰段落の実験を踏まえて、自分が見ているものをつじつまが合ってさえいれば、すべて現実だと思い込んでしまうという人間の愚かさと言及している。
- ⑤ ⑰段落では、現実シーンと代替現実シーンを繰り返し返して経験した後では、判断能力が低下することを指摘し、⑲段落で述べる全体の結論の根拠としている。

第3問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

撰関家の屋敷に仕えていた利仁は、以前、同僚の古参の五位の侍の、飽きるほど芋粥を食べたという願いに対し、ご馳走をしましょうと約束をしたことがあった。ある日、利仁は、一緒にお湯浴びに参りましょうと、部屋にいた五位の侍を誘う。

五位の供には、あやしの童だになし。利仁が供には、調度懸け、舎人、雑色一人ぞありける。川原うち過ぎて、粟田口にかかるに、「いづくへぞ」と問へば、ただ、「ここぞ、ここぞ」とて、山科も過ぎぬ。「こはいかに。ここぞ、ここぞとて、山科も過しつるは」といへば、「あしこ、あしこ」とて、関山も過ぎぬ。「ここぞ、ここぞ」とて、三井寺に知りたる僧のもとに行きたれば、「ここに湯沸かすか」と思ふだにも、「物狂ほしう遠かりけり」と思ふに、ここにも湯ありげもなし。「いづら、湯は」といへば、「まことは敦賀へ率て奉るなり」といへば、「物狂ほしうおはしける。京にてさとのたまはましかば、下人なども具すべかりけるを」といへば、利仁あざ笑ひて、「利仁一人侍らば、千人と思せ」といふ。かくて物など食ひて急ぎ出でぬ。そこに利仁胡ぐひ取りて負ひける。

かくて行く程に、三津の浜に狐の一つ走り出でたるを見て、「よき使ひ出で来たり」とて、利仁狐をおしかくれば、狐身を投げて逃ぐれども、追ひ責められて、え逃げず。落ちかかりて、狐の後足を取りて引きあげつ。乗りたる馬、いとかしこしとも見えざりつれども、いみじき逸物にてありければ、いくばくも延ばさずして捕へたる所に、この五位走らせて行き着きたれば、狐を引きあげていふやうは、「わ狐、今宵のうちに利仁が家の敦賀にまかりていはんやうは、『にはかに客人を具し奉りて下るなり。明日の巳の時に高嶋辺にをのこども迎へに、馬に鞍置きて二疋具してまうで来』といへ。もしいはぬものならば。わ狐、ただ試みよ。狐は変化あるものなれば、今日のうちに行き着きていへ」とて放てば、「荒涼の使ひかな」といふ。「よし御覽ぜよ。まからではよにあらじ」といふに、早く、狐見返し見返しして前に走り行く。「よくまかるめり」といふにあはせて走り先だちて失せぬ。

かくてその夜は道にとまりて、つとめてとく出で行く程に、まことに巳の時ばかりに三十騎ばかりこりて来るあり。何にかあらんと見るに、「をのこどもまうで来たり」といへば、「不定の事かな」といふ程に、ただ近に近くなりてはらはらとおるる程に、「これ見よ。まことにおはしたるは」といへば、利仁うちほゑみて、「何事ぞ」と問ふ。おとなしき郎等進み来て、「希有の事の候ひつるなり」といふ。まづ、「馬はありや」といへば、「二疋候ふ」といふ。食物などして来ければ、その程におりて食ふついでに、おとなしき郎等のいふやう、「夜部、希有の事の候ひしなり。戌の時ばかりに、台盤所の胸をきりにきりて病ませ給ひしかば、いかなる事にかとて、にはかに僧召さんなど騒がせ給ひし程に、手づから仰せ候ふやう、へ何か騒がせ給ふ。おのれは

狐なり。別の事なし。この五日、三津の浜にて殿の下らせ給ひつるにあひ奉りたりつるに、逃げつれど、え逃げで捕へられ奉りたりつるに、『今日のうちに我が家に行き着きて、客人具し奉りてなん^c下る。明日巳の時に、馬二つに鞍置きて具して、をのことも高嶋の津に参りあへといへ。もし今日のうちに行き着きていはずは、からき目見せん^dずるぞ』と仰せられつるなり。をのこともとくとく出で立ちて参れ。遅く参らば我は勘当蒙り^eなん』と、怖^fぢ騒がせ給ひつれば、をのこともに召し仰せ候ひつれば、例^cさまにならせ給ひにき。その後鳥とともに参り候ひつるなり」といへば、利仁うち笑みて五位に見合^{みあは}すれば、五位あさましと思ひたり。物など食ひ果てて、急ぎ立ちて暗々^{くらくら}に行き着きぬ。「これ見よ。まことなりけり」とあさみ合^あひたり。

〔宇治拾遺物語〕による

(注) 調度懸け、舎人、雑色——全て利仁の従者。

粟田口——地名。古くからの交通の要地。

問へば——主体は、五位の侍。

敦賀——利仁の故郷。三井寺からは、はるか遠方である。

胡ぐひ——矢を入れて背負うための武具。

まからではよにあらじ——行かないでは絶対にいられまい。

こりて——一団となつて。

不定の事かな——思いがけなく意外なことだなあ。

郎等——家来。

台盤所——奥様。ここは利仁の妻のこと。

手づから仰せ候ふやう——自らおっしゃいますことは。主体は、台盤所(＝利仁の妻)。

勘当——とがめ。

あさみ合ひたり——主体は、利仁の屋敷に仕える家来たち。

問1 傍線部ア・イの古語の読みを、現代仮名遣いを用いてひらがなで記せ。

ア 舎人

31

イ 戊

32

問2 傍線部あゝえの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ 物狂ほしう

33

- ① 落ち着かなくて
- ② みすぼらしくて
- ③ 正気を失う程
- ④ 不愉快に感じる程
- ⑤ すばらしくて

い いみじき

34

- ① とても上品な
- ② とても価値の高い
- ③ とても内気な
- ④ とても気難しい
- ⑤ とても優れた

う 巳の時

35

- ① 午前六時ごろ
- ② 午前八時ごろ
- ③ 午前十時ごろ
- ④ 午後一時ごろ
- ⑤ 午後四時ごろ

え つとめて

36

- ① 翌朝
- ② 夜明け
- ③ 前の晩
- ④ 午前中
- ⑤ 今夜

問3 波線部 a 「侍ら」・ b 「奉り」の敬語の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 a 37 b 38

- ① 謙讓語で、狐から利仁に対する敬意を表している。
- ② 謙讓語で、利仁から五位に対する敬意を表している。
- ③ 謙讓語で、利仁から狐に対する敬意を表している。
- ④ 丁寧語で、利仁から五位に対する敬意を表している。
- ⑤ 丁寧語で、作者から五位に対する敬意を表している。
- ⑥ 丁寧語で、作者から利仁に対する敬意を表している。

問4 波線部 c 「なん」の文法的説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

39

- ① 助動詞＋助動詞
- ② 係助詞
- ③ 動詞＋助動詞
- ④ 終助詞
- ⑤ 動詞の一部＋助動詞

問5 波線部 d 「見せんずるぞ」の文法的説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。 40

- ① 動詞＋助動詞＋助動詞＋助動詞＋助詞
- ② 動詞＋助動詞＋助動詞＋助動詞＋助動詞＋助動詞＋助詞
- ③ 動詞＋助動詞＋助詞
- ④ 動詞＋助動詞＋助詞＋助詞
- ⑤ 動詞＋助動詞＋助動詞＋助詞

問6 傍線部 A 「さ」の指す内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

41

- ① 物狂ほしう遠かりけり
- ② いづら、湯は
- ③ 物狂ほしうおはしける
- ④ 敦賀へ率て奉るなり
- ⑤ 利仁一人侍らば、千人と思せ

問7 傍線部B「もしいはぬものならば」とあるが、どういうことか。後に省略されている表現を考えて、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 42

- ① 伝言を家の者たちに伝えなければ、狐をひどい目に合わせるだろうということ。
- ② 伝言を家の者たちに伝えなければ、利仁が恥をかくことになるだろうということ。
- ③ 伝言が家の者たちに伝わらないと、五位をもてなすことができなくなるということ。
- ④ 狐が利仁の言う通りにしないと、利仁が五位に馬鹿にされてしまうということ。
- ⑤ 狐が何も返事をしないのならば、返事をするまで逃がさないだろうということ。

問8 傍線部C「例ざまにならせ給ひにき」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 43

- ① 利仁が、不思議な現象が起きるのはいつものことで、すっかり慣れていたということ。
- ② 利仁の家来たちが、いつもの作法で客人の五位を無事もてなすことができたということ。
- ③ 狐が、利仁の妻である奥様に、その後しばらくの間とり憑いたままだったということ。
- ④ 利仁の妻である奥様が、容体が急変しそのまま亡くなってしまったということ。
- ⑤ 利仁の妻である奥様が、狐にとり憑かれる前の元の状態に戻ったということ。

問9 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 44

- ① 利仁の友人である五位が、日ごろから飽きるほど芋粥を食いたいと願っていたことは、利仁の妻も知っていた。
- ② 利仁が客人を連れて帰宅すると伝言した狐は、連絡を受けた家の者が馬に乗って利仁を迎えに行く途中でとらえられた。
- ③ 狐は利仁の妻にとり憑いて、客人を連れて行くので馬を用意して迎えに来なさいという利仁の言葉を家の者に伝えた。
- ④ 狐が利仁の妻に伝えた伝言は、利仁が危篤なので馬を二頭用意して迎えに来てほしいという内容であった。
- ⑤ 狐が五位に変身して、利仁の家の者に虚偽の伝言を言ったところ、家の者たちはまんまとだまされた。